

日本の主な火山活動

噴火したのは、桜島、薩摩硫黄島、諏訪之瀬島の 3 火山で、従来からの山頂噴火が継続した。

三宅島の火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は長期的に減少傾向にあるが、日量 3 千～1 万トン程度と多い状態が継続した。

阿蘇山では浅部の熱的な活動がやや活発な状態が継続した。

以下に、噴火した火山（ ）及び観測データ等に变化のあった火山（ ）について、活動の概況と解説を示す。

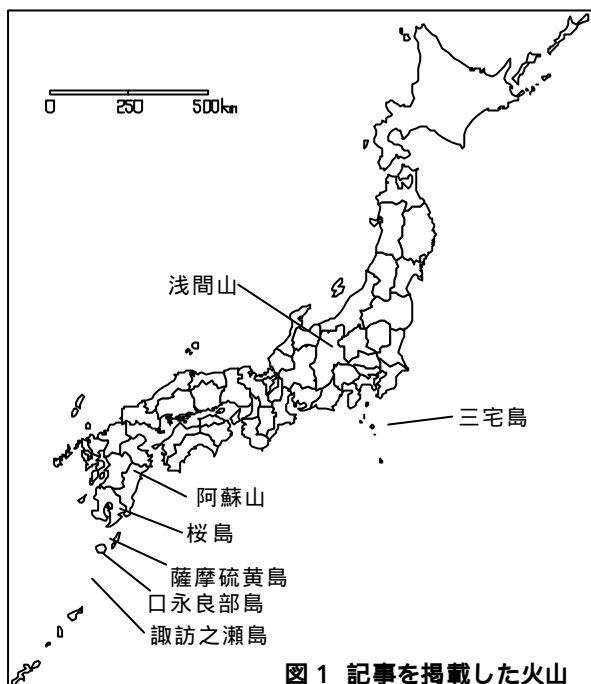


図 1 記事を掲載した火山

表 1 過去 1 年間に記事を掲載した火山

火 山 名	平成14年（2002年）				平成15年（2003年）							
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
摩 周												
雌 阿 寒 岳												
十 勝 岳												
樽 前 山												
北 海 道 駒 ヶ 岳												
浅 間 山												
箱 根 山												
伊 豆 東 部 火 山 群												
伊 豆 大 島												
三 宅 島												
八 丈 島												
福 徳 岡 ノ 場												
阿 蘇 山												
雲 仙 岳												
霧 島 山												
桜 島												
薩 摩 硫 黄 島												
口 永 良 部 島												
諏 訪 之 瀬 島												

各火山の活動概況

【噴火した火山】

桜 島 従来からの山頂噴火が継続したが、月間の噴火回数は 1 回で、桜島の活動としては低調であった。

薩摩硫黄島 従来からの小規模な山頂噴火が継続した。微動がほぼ全期間を通して連続的に発生し、火山活動はやや活発な状態で推移した。

諏訪之瀬島 従来からの小規模な山頂噴火が継続したが、確認された噴火回数は 2 回で、諏訪之瀬島の活動としては低調であった。

【観測データ等に变化があった火山】

浅間山 地震・微動の発生回数がやや多く、火口底温度が高い状態が依然継続した。

三宅島 火山活動は長期的にゆっくりと低下している。火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は長期的には減少傾向にあるが、日量 3 千～1 万トン程度と依然多い状態であった。

阿蘇山 中岳第一火口浅部の熱的な活動が引き続きやや活発であった。湯だまり温度が 70 を超えて高い状態にあり、湯だまり量の減少も続いている。また、中旬には微動が連続的に発生した。7月にみられた土砂噴出は今期間は発生しなかった。

口永良部島 今年に入り地震・微動の活動がやや活発になっている。

表 2 2003 年 8 月の火山情報発表状況

火山名	情報の種類と号数	発表日時	概要
三宅島	火山観測情報第422号 (1日2回発表) 火山観測情報第483号	1日09時30分 31日16時30分	活動経過ほか(噴煙・地震・微動・空振・火山ガス・地殻変動の状況、上空の風・火山ガスの移動予想)
阿蘇山	火山観測情報第14号	4日11時00分	火山活動がやや活発(連続的な微動は収まったが孤立型微動は多い、湯だまり温度が高い状態)

各火山の活動解説

火山名の後の[噴煙・噴気・地震・微動・空振・地殻変動・熱・火山ガス等]は、掲載した理由となった火山現象を示す。

【噴火した火山】

桜島 [爆発]

従来からの南岳山頂の噴火が継続したが、桜島の活動としては比較的静かな状態であった。

月間の噴火回数は1回(爆発)で、桜島の活動としては低調であった。この噴火に伴う噴煙の状況は雲のため不明で、噴石の飛散や体感空振は観測されなかった。鹿児島地方気象台(南岳の西南西約11km)では、6月、7月に引き続き降灰は観測されなかった。

GPSによる地殻変動観測では、特に異常な変化はみられなかった。

薩摩硫黄島 [噴煙・降灰・微動・地震]

従来からの小規模な山頂噴火が発生した。

12日、13日、15～18日に噴火し、三島村役場硫黄島出張所及び鹿児島中央警察署硫黄島駐在所によると、13日、15～18日に島内で降灰が確認された。

ほぼ全期間を通じて、噴火活動の活発化を示す継続時間の長い微動が観測された。地震活動は、A型地震の月回数は25回(7月32回)と少ない状態であったが、B型地震の月回数が141回(7月62回)とやや増加傾向がみられた。

諏訪之瀬島 [噴煙・地震・微動]

従来からの小規模な山頂噴火が発生した。が、諏訪之瀬島の活動としては比較的静かな状態であった。

19日に付近を航行中の「フェリーとしま」からの目撃情報により、31日に監視カメラにより噴火を確認したが、いずれも爆発ではなかった(7月の爆発20回)。十島村役場諏訪之瀬島出張所によると、島内の集落(御岳の南南西約4km)では降灰は確認されなかった。

地震活動は、A型地震の月回数が14回(7月30回)と少ない状態であった。B型地震は、前期間の7月下旬に多発し、7月の月回数が979回となったが、その後は減少し、今期間の月回数は207回であった。また、継続時間の長い微動が、たびたび発生した。

【観測データ等に変化があった火山】

浅間山 [地震・微動・熱]

火山活動はやや活発な状態が続いている。

地震活動は、2000年9月以降、やや活発な状態が続いている。今年の6月末頃から微小な地震が増加し、今期間の1日当たりの回数は30～80回程度と多い状態が続いた。8月の月回数は1,798回であった(7月1,837回、以上図2)。また、今年の4月以降に発生回数が増えている規模の小さい微動は、月回数が14回(7月37回)と依然やや多い状態で推移した。

火口底の温度は、群馬県林務部のカメラによる観測で、噴気孔周辺において引き続き高温域が確認されている。

GPSによる地殻変動観測では、特に異常な変化はみられなかった。

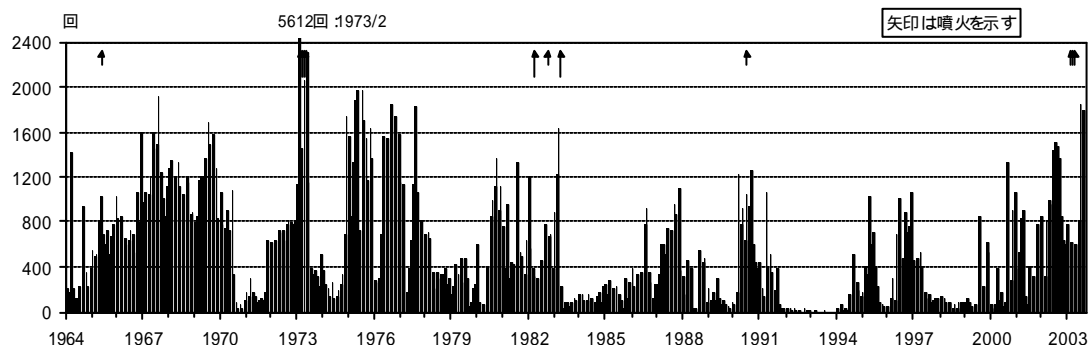


図 2 浅間山 月別地震回数(1964年1月～2003年8月)

三宅島 [火山ガス・噴煙・熱]

火山活動は全体としてゆっくりと低下している。山頂火口からの火山ガスの放出量は長期的には減少しているものの、依然多量の二酸化硫黄の放出が続いている。

5日、12日、20日、25日に気象庁が行った上空からの二酸化硫黄の放出量の観測¹⁾では、日量 5,000~9,000 トンと依然多量の放出が継続していることが確認された(図 3)。

また、同時に気象庁、産業技術総合研究所及び大学合同観測班が行った上空からの観測¹⁾では、主火口からの白色噴煙の放出が継続し、火山ガスを含む青白い噴煙が火口上空から風下に流れているのが確認された。火口内温度の観測は、いずれの場合も雲のため実施できなかった。

白色の噴煙は山頂火口から連続的に噴出しており、噴煙の高さの最高は火口縁上 1,000m であった(7月 は 700m)。

山頂直下の地震活動は、やや低周波の地震が 4 月以降増加傾向にあったが、8 月は前月に比べて減少した。連続的に発生している微動の振幅は小さくなっている。

GPS による地殻変動観測、磁力の連続観測では、特に異常な変化はみられなかった。

1) 海上保安庁、警視庁、東京消防庁、陸上自衛隊の協力による。

日に観測された。これらに伴い、噴煙活動等には特に異常な変化はみられなかった。孤立的な微動の発生回数は 7 月中旬からやや多い状態で推移しており、今期間の月回数は 1,740 回(6 月 167 回、7 月 1,680 回)であった。

GPS による地殻変動観測では、特に異常な変化はみられなかった。

- 1) 湯だまり：活動静穏期の中岳第一火口内には、地下水などを起源とする約 50~60 の緑色のお湯が溜まっている(湯だまり)。火山活動が活発化するにつれ、湯だまり温度が上昇・噴湯して湯量の減少がみられ、その過程で土砂を吹き上げる土砂噴出現象等が起り始めることが知られている。
- 2) 噴湯：湯だまり内で火山ガス等が噴出し、湯面が盛り上がる現象。

口永良部島 [地震・微動]

2003 年に入り地震・微動の活動がやや活発になっている。

1999 年 7 月~2000 年 3 月に活発化した微小な地震の活動は、その後少ない状態で推移してきたが、2003 年に入りやや多い状態となっており、8 月の地震の月回数は 116 回であった(2002 年の月平均は約 40 回、2003 年の月回数は 73~160 回)。

また、2 月以降観測されている微動がやや増加傾向にあり、8 月は 28 回発生した(7 月は 13 回)。

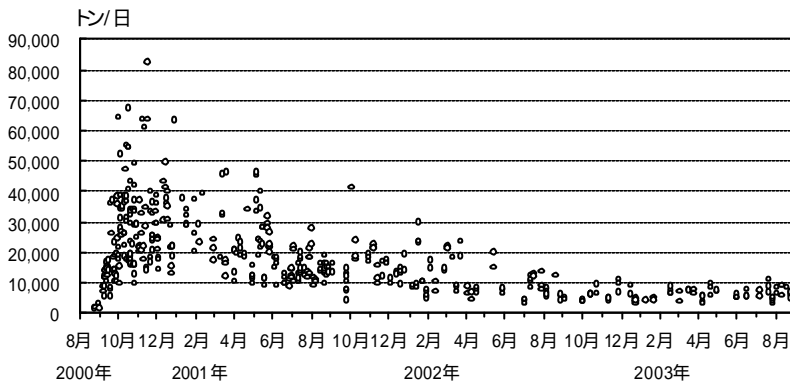


図 3 三宅島 火山ガス(二酸化硫黄)放出量 (2000 年 8 月~2003 年 8 月)

阿蘇山 [熱・微動・地震]

中岳第一火口の浅部の熱的な活動が高まっており、一時連続的に微動が発生した。

今期間は 7 月にみられた土砂噴出は観測されなかった。

中岳第一火口の湯だまり¹⁾の状況は、7 月 10 日の土砂噴出発生後には湯が灰色に濁っていたが、8 月 19 日にはやや濁りが取れ乳緑色となっていた。表面温度は 73~76 (7 月は 72~79) で、依然として高い値で推移している。湯だまり量は、6 月 3 日の現地観測で 9 割に減少したことを確認した後、一時的に降水により増えることはあるが、9 割程度で依然減少傾向が続いている。また、5 月 21 日以降、湯だまりの中央部付近での噴湯²⁾が続いている。中岳第一火口の南側火口壁下の高温部の温度も、352~373 で依然として高い状態にあった。

噴煙の状況は、月間を通して白色・少量で、噴煙の高さの最高は火口縁上 500m で特に異常な変化はなかった(7 月 600m)。

微小な B 型地震は、6 月末~7 月中旬にかけてやや多くなり 7 月下旬から減少したが、8 月 17 日、18 日、24 日に一時的に増加した。B 型地震の月回数は 281 回と依然やや多い状態であった(7 月は 446 回)。A 型地震の回数は少なかった。

前期間の 7 月 27 日 14 時頃~31 日 18 時頃に 8 年ぶりに観測された連続的な微動は、今期間は 8 月 9 日、13~14